

世界の人びとのための J I C A 基金活用事業
終了時活動報告書（2023 年度採択案件）

1. 業務の概要	
(1) 案件名	布ナプキンの縫製クラブ活動の樹立と生理衛生教育の推進
(2) 実施団体名	NPO 法人 函館アフリカ支援協会
(3) 実施期間	2024年7月10日～2025年7月9日
(4) 実施国	東アフリカ ウガンダ共和国
(5) 活動地域	ブケディア県 カンゴレ地域
(6) 活動概要	
①活動の背景：	
公立はこだて未来大学のバゲンダ准教授は、自分を日本に留学させてくれた母国への恩返しの為首都カンパラの北東、350 キロ離れた最貧地域のブケディア県、カンゴレ副郡のカパリス村で、雨季になると通学路が水没し、8 キロほど離れたパブリックスクールに通えなくなる子供達の為に、父兄が県の教育委員会に懇願し開校出来たコミュニティースクールのカパリス小学校への支援を 2015 年から始めた。バゲンダ准教授からカパリス小学校支援の協力を求められた NPO 法人・函館アフリカ支援協会は、電気が無い地域なので足踏みミシンがあれば、卒業後の子供達の生活自立になるとのバゲンダ氏の要望に応え、日本から運んだ 167 台のミシンを使った、縫製技術教育 5 ケ年計画を 2018 年から 2022 年 3 月を目途に、希望する男女の生徒へ縫製技術教育を始めた。放課後教育として始めたこの教育は、時々学校に来なくなる女子生徒いることで、縫製教育の進み具合に滞りが生まれる事になった。理由は、女子生徒に生理が始まった事だった。この問題を置き去りにしては 5 ケ年計画が崩れてしまう懸念が生まれた。ウガンダでは女性の生理に触れることはタブーとされているが、この女子生徒の生理の問題を無視出来ないという現実と向き合うことになった。	
②活動の目標：	
女子生徒の生理の貧困を解消する為、女子生徒の学年ごとに布製ナプキンの縫製技術を教え、先輩から後輩へナプキンの縫製技術を継承出来るクラブ活動の樹立と生理衛生教育を推進する。 この地域の生理の貧困の問題は 2 つある。生理は主に小学校 5 年生から始まるが、1 つ目に子供達はある時、突然始まる月経のリズムや意味を理解出来ていない。2 つ目は必要な時に必要な数のナプキンを用意出来ず月経に対応できない為、学校に来なくなる。母親は子供の妊娠を警戒し、子供を家から出さなくなる。その為、次の 3 点に取り組んだ。1、女子生徒の生理への対応力を高める為、布ナプキンの縫製教育を行いそれを先輩から後輩に継続できるクラブ活動にする。2、月経のサイクルを記録し、月経の意味を理解し望まぬ妊娠を避ける知識を身に付ける。3、縫製技術を身に付け、貧困から抜け出すスキルを身に付ける。	

2. 業務実施結果

(1) 実施した内容

1、女性の生理に触れることはウガンダではタブーとなっており、地域の意識を変える為、地域の有力者、校長会、行政など、男性有力者への理解と協力を求める活動を行った。2、各学校で生理衛生教育を担当する教員はシニア・ウーマンティーチャーになるので、担当教員への生理衛生教育と布ナプキンの縫製技術を取得するワークショップを UGGA (Uganda Girls Guide Association) と連携して開催した。対象者は将来、転勤があってもこの活動が継続出来るようカンゴレ副郡 9 校の女性教員へ広げて開催した。3、カパリス小学校でも毎年、妊娠し学校を去る女子生徒がいるので生理の記録を付ける事により妊娠する危険が排卵の前後にあることを学び、望まぬ妊娠を避ける教育を実施した。

(2) 実施成果：

1、2024 年 10 月の国際女性デーにカンゴレ副郡 9 校の女子に「STOP○○○○」と止めて欲しい行為のポスター展を各校校長のもとクラブ活動として行い、早すぎる妊娠が第一位になった。地域の意識が変わりブケディア県で初めて女子の代表 10 名が 8 月開催の UGGA の全国代表者キャンプ大会に参加することになった。2、2024 年 9 月に UGGA とコラボして、カンゴレ副郡 9 校の女性教員 18 名のワークショップを開催した。参加した教員の意識が変わり、2025 年 2 月の新学期から女子生徒が自分の生理の周期表を記録し個人へのカウンセリングをしている。担当のシニアウーマンティーチャーから授業の中で月経周期と妊娠可能日は生徒によって異なる事が分かり、継続的な指導の必要が分かった。3、布ナプキンの縫製クラブ活動として本事業で縫製技術指導を担当するナマタ先生から指導を受け、活動に参加した全女子生徒が初めてナプキンを作り完成させる事ができ目標を達成できたとの報告があった。

(3) 得られた教訓など：

1、女性の生理に触れることは、男女差別の価値観が根強く残るウガンダで、こうした活動が L G B T の活動と誤解されたら殺害される危険が常にあり、地域の有力者へ理解を広げる経験が出来た。この活動は今後も継続する必要がある。2、女子生徒が新学期の 2 月から自分の生理の記録を付け始めた、これにより生理のリズムが 28 日周期かと思えば 30 日周期になったり、月経が無い月があったり、記録を付け、シニアウーマンティーチャーのカウンセリングで排卵の時期を記録出来、妊娠の危険を避ける知識を身に付けることが出来るように進んでいる。3、担当する教員の側にも望まぬ妊娠を避けるカウンセリング力も向上している。8 月には生徒の気持ちの変化について調査分析をする。

(4) 今後の活動・フォローアップの方針：

1、布ナプキンのクラブ活動の樹立の課題：縫製技術指導者であるナマタ先生がカンパラからカパリス小学校へ毎月通って来てくれているが、今学期が終了する 2025 年 11 月までに先輩が後輩に縫製技術を継承出来るように 7 年生が卒業後の現在の 5 年生 6 年生の 2026 年へ、意識向上と体制を作る。クラブ活動の樹立には校長の許可が必要と分かり、9 月から始まる 3 学期に校長の許可と協力を得て、まず 7 年生が 6 年生にクラブ活動の意義を啓発することとなった。

2、生理衛生教育の推進と望まぬ妊娠を避ける為、11 月に卒業する 7 年生の女子生徒は卒業後は学校に行くことが出来ない為、生理の周期表を卒業後も記録し地域の VHT (Village Health Team) に相談できる体制を作って行きたい。

3、生理の周期表を記録する取組は、ウガンダの公教育には無いことをしているので UGGA の協力を得て女子の生理衛生教育の一環として、公教育のカリキュラムに加えることが出来ないか、UGGA 及び教育委員会と懇談の機会を設けていきたい。

4、生理の時に学校に来なくなる問題は、母親との懇談が必要で 3 学期に家庭訪問を検討している。なぜなら、生理が始まると子供を家から出さなくなるという現状は変わっておらず、生徒の母親には学校で娘たちに行っている生理の周期表をもとにした生理衛生教育の現状と狙いを説明し理解を得ることが必要である。ウガンダの 7 年制の小学校公教育の中で、子供が通学する年齢を決めるのは母親で、日本のように 6 歳から 1 年生という事がない。9 歳から通学する子もいれば 10 歳から通学を始める生徒もいる。そのため 16 歳や 17 歳の小学校 7 年生が普通に存在する。カンゴレ副郡内の 9 校の聞き取り調査を行った 2025 年 4 月のバゲンダ先生からの報告では 20 歳の 7 年生が 2 名いた。子供に生理が始まると所得の多い男性に嫁がせたいと思っている母親は、妊娠を恐れて家から出さない。生理の時でも母親が安心して子供の通学が出来る環境を作るために、3 学期（9 月～11 月）に校長の協力のもと通学圏内の母親の意識調査と母親の意識を変える取組を始める。

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

- 1、ウガンダの7年制の小学校教育は、カパリス村のような貧困地域では生涯で受ける公教育のほとんどは、この7年間で終了する状況で、中学校や高校へ進学する生徒は極く少数である。電気が無いので足踏みミシンを使った縫製教育は卒業後の生徒の生活自立を目指して行ってきた経緯もあり、現在、卒業生の中にはミシンを購入し、自分の店を持つ卒業生が現れてきた。
- 2、生理衛生教育は女子生徒の望まぬ妊娠を避ける為、女子生徒自身が生理の周期表を記録し客観的な記録を付ける経験をもとに、シニアウーマンティーチャーも明確なアドバイスが出来るように共に成長している、この意識の変化を地域の有力者への報告会の開催へ進めていく。
- 3、カパリス村での事業が継続出来ている背景のエピソード：
カパリス村から十数キロ離れた人口約8万人のカバルワ村には中学、高校がある。2025年よりある学校でタブレットを使ったSNS教育を始めた。しばらくして、教室からタブレット、電気の配線、関連する機材の全てが消えてしまった。貧困からくる盗難事故であるが誰も分からないとのこと。
さらに貧困なカパリス村では、ミシンは無くならないのか？という疑問が出てくる。カパリス小学校で盗難がないのはなぜか。理由として①足踏みミシンを使った縫製教育を始めた2018年に大きなコンテナハウスを教室の全てから見渡せる場所に大型トレーラーで搬入し設置したこと、②2024年度の当初、縫製の資機材を保管するロッカーの設置を教室内に考えたが、生徒の急増により5年6年7年の生徒が混在するので、コンテナハウス内に設置したこと、が考えられる。結果的に盗難防止につながり、活動が継続できた。カパリス村では、今回のJICAの援助、今までのHASAの活動は、村の未来への希望となっている。盗難があればこの活動は消えて無くなると村人は思っており盗難防止に協力している。

(2) 活動の写真



ミシンを使ったナプキンの縫製技術教育



生理の自己周期表を記録し望まぬ妊娠を避ける授業



カパリス小学校の学校給食の様子



ナプキン縫製の様子



生理の周期表の生徒の例



早すぎる結婚、妊娠を後悔しているポスター

(3) JICA 基金活用事業を実施したことで団体の成長につながった点・良かった点

- 1、JICA の基金活用事業に応募し、採択された経験は始めてであり、基金の予算執行の為には実施国での NGO 法人登録が必須とのことで、申請に必要な 17 項目の書類を取り纏めた。日本国公印が必要と言われた書類は外務省に申請し公印を受けた。その後から NGO 局から日本国ウガンダ大使の推薦状を提出しなさいとか思わぬ追加があり、大使の推薦状を申請する書類を用意し、当時の福澤秀元大使の丁寧な推薦状を頂くなど、約 1 年間の期間を経て、ウガンダ人である公立はこだて未来大学のバゲンダ准教授に NGO 局へ提出をお願いしたところ、活動を許可する地域のブケディア県の行政のトップの推薦状、更に外務省の推薦状、加えて、文部省の推薦状を付けなさい、という全てのハードルを超えて、ここまで完璧に書類を揃えて申請したところはありませんと言われ、2024 年 5 月 6 日に NGO 法人登録が出来た貴重な経験を積むことが出来た。
- 2、今回の基金活用事業の予算執行の為、現地の NGO 法人と協働して執行することも出来ると提案があり、現地の様々な NGO 法人と連絡を取り進めた経験によりウガンダ社会の中で活動している様々な NGO 法人の活動を知ることができ、最終的にはバゲンダ准教授の提案で UGGA と連携できることになった。これからの活動に貴重な経験と展望を持つ事が出来た。